

(「南信州」紙掲載用原稿)

## 元水曲柳開拓団員・加藤宗一さん(高森町)の満蒙開拓体験談

今年も終戦65年目の夏が来た。戦前・中、旧満州に全国で最も多くの満蒙開拓団を送出したこの飯田・下伊那地方。年々風化していくこの満州体験を忘れることなく平和の尊さを語り継いでいかななくてはならない。この飯田・下伊那地方から送出した最大の開拓団であった「水曲柳開拓団」(現在の吉林省舒蘭市にあった)の元団員であり、終戦前後の開拓団の様子を知る数少ない壮年男性の生き残りでもある高森町山吹在住の加藤(旧姓安藤)宗一さん(88歳)に当時の生々しい体験談を語ってもらった(以下は加藤さんの談話よりの抄録。内容等は加藤さんのお話のままとした)。

(聞き取り日) 平成22年8月8日

(聞き取り場所) 加藤さんご自宅

(聞き取り者) 寺沢 秀文 (水曲柳会事務局長)

私(加藤)は大正11年(1922年)2月10日、現在の高森町山吹の小沼の農家に四番目の子として生まれた。兄弟は6人いたが、上の2人は早くに亡くなり、私は実質的には次男坊だった。実家(加藤さんは戦後帰国してから現在の加藤家に養子に入った)は安藤と言ひ、養蚕と水田主体の農家であったが、当時は蚕の値段が下がるなどして生活はどこの農家も貧しかった。昭和3年に山吹小学校に入学、その後8年間学び、高等科2年を終えてから、同級生4人と共に大阪市東区のワイシャツ工場に見習い行員として丁稚奉公した。このワイシャツ工場の経営者の奥さんが山吹村新田の出身であったところから、以前から山吹村からも何人もがこの工場にお世話になっていた。私は一緒に行った4人の中でも最も最後まで働き、昭和17年まで勤めていた。昭和17年になって、出身地の山吹村で徴兵検査を受けることになり、帰郷して徴兵検査を受けたところ、肺結核にかかっていることが判明し、丙種合格とされ徴兵義務は免れることになった。しかし、大阪のワイシャツ工場も辞めることになり、実家に戻り、飯田の中央通りにあった松井医院に通院、療養しながら家の農業を手伝っていた。

昭和19年になって、県から「小諸市の結核療養所に入れ」という命令が来たが、その時、同じ山吹村の高野三男さん(元水曲柳開拓団員。故人)のお兄さんで旧山吹村役場に勤めていた人が、「満州に行ってしまったということにしておく」と言ってくれ、小諸の療養所には行かずに満州に行くことになった。実はこの少し前から、安藤家の本家から出て水曲柳開拓団の哈?塘(はまたん)に行っていた安藤重(しげ)さん(水曲柳開拓団の第二次として入植。故人)から、「水曲柳の朝陽屯で一軒空家が出たので来ないか」という誘いを受けており、6歳年下の弟(安藤武男さん。故人)と共に行く意思を固めていた。特にこの時には面接のようなことは無かった。満州に渡ったのは昭和19年の4月。ちょうど家族招致のために水曲柳から一時帰国していた山吹村出身の寺沢幸男さんとその先月

に結婚したばかりの新妻のツギさん、同じく神稲村出身で結婚したばかりの北沢順治さん・栄さん夫妻に連れられて、私たち兄弟を加えた計6人で山吹駅を出発した。新潟港から船で朝鮮の仁川に渡り、そこから鉄道で満州に入り、たぶん1週間程度かかって、ようやく水曲柳に着いた。水曲柳駅に着くと、安藤重さんがちょうど水曲柳を一時訪問していたお父さんと共に迎えに来てくれていた。それから約1年間、水曲柳の哈?塘の安藤重さんの家に弟と共に居候して農業の手伝いをして暮らした。重さんは開拓団の本部勤めをしており、2部屋程度しかなかった粗末な草葺、土壁の小さな家に一緒に住み、重さんの家族と共に10町歩の畑を耕した。タバコ、馬鈴薯、トウモロコシなどを作ったが作柄は良かった。水田もあったがこちらは朝鮮人の小作人にやらせていた。哈?塘には当時、7軒程度の日本人家族が住んでいたと思うが、現地の中国人、朝鮮人の人たちとの関係は良好であったと思う。私もそこに住んでいた中国人で日本語を話せる青年がおり、この人とは仲良くしており、その結婚式にも招待してくれた。私も昭和20年4月に、飯田市内から水曲柳の林家油房に一家で入植していた太田ちせ(当時21歳)と結婚。ちせは両親と4人の兄弟との6人家族で、当時、開拓団本部に事務員として勤めていた。時局もあって結婚式らしいことはしなかったが、林家油房に住んでいた高野ミツさん(高野三男さんの奥さん。故人)のお兄さんが仲人してくれた。結婚するとほぼ同時に水曲柳の中心部付近にあった朝陽屯に移り住んだ。上郷村出身の井坪さんという人が別に新しい家を造って移り住み、朝陽屯のそれまでの家が空いたのでそこに入って暮らすようになった。

その後、昭和20年7月になって私にもついに召集令状が来た。この時、水曲柳からは親戚の安藤重さんと私の2人が徴兵され、すぐに2人で列車にて江密峰という所まで行き、軍隊生活に入った。しかし、軍隊といってもちゃんとした兵舎も無い幕舎(テント)生活で、確か軍服だけは支給されたが銃などの武器は支給されず、特に訓練なども無かった。その後、江密峰での幕舎(テント)生活は終戦まで続き、日本が負けたことは江密峰から列車で撫順(現在の遼寧省撫順)に向かう途中で知った。それ以前の8月9日にソ連軍がソ満国境を越えて攻めてきていたということは全く知らずにいて、そのことは後で知った。撫順に着いたものの、そこで日本軍将校から「元の村に帰れ」という命令を受け、水曲柳に帰ってきた。たぶんまだ8月のうちであったと思う。水曲柳に帰ってみると、朝陽屯の人たちは安全のためにと集団で共同生活をしていた。水曲柳からは今村清団長を始め徴兵されてまだ帰らない男の人何人もいたが、私たちのように軍隊から帰されて戻っていた男性も何人かいた。9月に入ってからのことだったが、ハルピン方面から通化(吉林省の通化か。日本関東軍の終戦前後の拠点の一つであった)へ向かうという青少年義勇隊の一団が水曲柳を徒歩で通過、朝陽屯近くで休憩を取り、それを引率していた2人の若い血気盛んな日本人将校が朝陽屯の人たちに「まだ日本は負けていない。通化まで行って戦い続ける」と吹き込み、これに感化された朝陽屯の軍隊帰りの何人かの決起盛んな男性3人ばかりが、我々もここから通化を目指し、そこで戦おうという話になった。そして、女子供は足手まといになるので集団自決をさせるということになり、一度は朝陽屯近くの墓地で集団自決させようとしたが、ここでは狭過ぎて無理ということになり、女子供もとにかく連れて行ける所まで行こうということになった。そして朝陽屯を出るという前の晩のことであったが、自分の住んでいた家に荷物を取りに戻ったところ、そこに銃で撃たれた水曲柳開拓

団の副団長の早川完吾先生(元下伊那農学校校長)が倒れて虫の息になっていた。たぶん、「集団自決など止めろ」と止めに来たのであろうと思うが、夜間であったため、周辺を警備していた現地中国人の警備兵に泥棒と間違えられて撃たれたのであろうと思う。そして、集団自決のあった9月9日の朝になって、取り敢えずの僅かの携帯食料等を持っただけで、約60～70人余りが朝陽屯を出発、通化を目指したが、その途中、水曲柳の山中の「七道河子(ちーどうほーず)」という付近で、現地人たちの襲撃を受け、私たちは二手になって逃げて別れてしまった。そして、別れたもう一つの集団は、もうこれまでとここで集団自決をしてしまった。私はもう一つの集団であったため、その時の様子は後で聞いたが、私の前妻のちせもこの時に、実母の太田ときと共に自決して亡くなってしまった、集団自決は警備用にと持つことが許されていた銃3丁で次々と撃っていったとのこと。この銃は特別に開拓団に自警用にと持つことが許されていたものであるが、この銃が無ければあのような集団自決など無かつたらうにと今でも残念でならない。ここで女、子供を含む62人が自決をしてしまった。水曲柳ではこの「七道河子(ちーどうほーず)」の集団自決が一番多くが亡くなり、他に小?屯、孟家屯の2ヶ所での集団自決、または現地人に襲われる等して亡くなっている。

その後、生き残った私たちは水曲柳に戻り、水曲柳の中の平安駅寄りの村に集結していた水曲柳開拓団の人たちと合流した。その後、拉浜線の平安駅近くに四国から来ていた平安開拓団の人たちが今後どうするかという情報を得てこいという指示を受けて、私、牧内実さん(故人)、水曲柳国民学校の教員であった横山先生(山口県出身)の3人で、平安駅近くまで来てみたところ、そこでは平安開拓団の人たちが現地人からの襲撃を受けているところに遭遇した。私たちは慌てて逃げたが、呼蘭川という川を渡った時に現地人に捕まってしまった。「殺してしまえ」と言われたが、この時、中国語を話せた牧内さんが中国語でお経を唱えて救いを求めたところ、これを聞いた現地人のお婆さんが「助けてやれ」と言ってくれたために命拾いをし、その後、連行されていくところをちょうど移動し始めた水曲柳の人たちの一行と出会い、ここでどうにか解放されて命拾いをすることが出来た。そして、9月半ばに水曲柳を出て、平安駅から鉄路でハルピン駅に到着し、ハルピンで2泊程度を過ごし、その後、満州国の首都であった新京(現在の長春)へと移った。新京では最初に河野開拓団(終戦時に集団自決)の跡に入り、その後に満鉄の宿舎に移った。この時、この当時のリーダー格であった仲田良一さん(故人)らが、各自が持っていたお金を全部出させて共同管理とし、みんなで助け合う体制を作ってくれたことは本当にありがたかった。こういったことがあって、水曲柳開拓団は比較的多くの人たちが生きて日本に帰ることが出来たと思う。新京での避難民生活が始まってから、水曲柳に残った人たちの様子を見に戻ろうという話しになって、私を含む5～6人で水曲柳に一度戻ることになった。もらってあった避難民証明書を見せると鉄道には無料で乗ることが出来、ハルピン経由で水曲柳に向かったが、途中、ハルピン駅での乗り換えの際に、私と国民学校の先生であった横山先生の2人は他の人たちとはぐれてしまい、2人だけの収容所に返されてしまった。しかし、横山先生は水曲柳に奥さんを残してきており、どうしても戻りたいと、再び私と2人だけで水曲柳に向かった。ようやく吉林市まで行ったが、ここから先には日本人はもういないと言われたが、横山先生の知恵で、満鉄の職員に変装して機関車に乗り込んで水曲柳

に向かおうとしたが、その頃、ソ連軍が鉄道沿いの電線を戦利品として撤収し持ち帰るための取り外しの作業をしており、その作業のために1週間程度、機関車に寝泊まりせざるを得なかった。1週間ほどして、ようやく舒蘭県の街(現在の舒蘭市)まで辿り着き、ここから徒歩で水曲柳まで向かい、水曲柳の現地残留組の人たちが集結していた北海道実験農場近くの「頭道河子(とうどうほーず)」という集落にようやくたどり着き、ここで水曲柳の人たちとも再会することが出来た。先に水曲柳に向かった3人もここにおり、また親戚の安藤重さんなどもここにいた。安藤重さんは日頃から現地の中国人とも仲良くしており、その中には現地で油工場を経営していた中国人とも早くから懇意で、この頭道河子での越冬生活の際にもいろいろと助けてもらっていた。

水曲柳への残留組は、終戦の年の冬をこの頭道河子で共同生活して越冬したが、ここでは発疹チフスと寒さ、食料不足のために冬を越せずに沢山の人が死んだ。自分も発疹チフスにかかったが運良く生き延びることが出来た。ここで亡くなった人たちは近くの山に葬った。厳寒期には土が凍り、死体を埋める穴すら掘れず、やむを得ず菰(こも)に包んで近くの山に置きに行ったが、翌日行くと、山犬に襲われたのかもう遺体は無くなっていた。この時は本当にひどい状況だった。最初の頃はソ連兵が時々やってきて「女を出せ」と言ってきた。ある時、どういうわけかこの「頭道河子」に暮らしていた特務機関員の日本人の若い奥さんが「私が代表で行きます」と言って連れられていったことは忘れられない。しかし、しばらくしてからソ連軍が去り、中国軍(八路軍)が来てからは規律もきちんとしていて治安はとても良くなった。その頃、八路軍は日本軍が使っていた日本馬を使用しており、その飼育等は日本人でなくてはうまく出来ないとのことで、私はその冬の数ヶ月を舒蘭市内の八路軍の司令部で日本馬の飼育のために寝泊まりし、ここでの生活は比較的恵まれていて、何とかこの冬を越すことが出来た。翌年の昭和21年の春以降、ようやく日本へ帰れるということになり、私たちも昭和21年9月に水曲柳を出発し、引き揚げ港の葫蘆島まで行って、ここから日本へ引き揚げたが、この時、どのようにして葫蘆島まで行ったのか、今では全く覚えていない。昭和21年10月に佐世保に入港し、ようやく故郷へ戻ることが出来た。

日本へ戻ってから実家にしばらくいたが、あの飯田大火(昭和22年4月10日)のあったと同じ時期に、縁あって同じ山吹村の加藤家に婿入り養子としてお世話になることになった。また一緒に満州から帰った弟の武男は、その後、北海道の浦幌に行って結婚もし、農業をしていたが、この弟も既に亡くなってしまった。私は現在はこうして家族に囲まれて平和に暮らしているが、水曲柳での僅か2年間程度の生活で、前妻を死なせ、多くの人たちが亡くなり、本当に可哀想なことをした。二度とあんな悲しいことがあってはいけないと思う。戦後、再び水曲柳に行けるようになってから一度だけ、水曲柳会の皆さんと共に水曲柳を訪問したが、水曲柳会として今も現地への訪問等を定期的に続けて交流し続けていることは本当に素晴らしいことだと思う。あの頃の辛いことは思い出したくも無いが、しかし、あんなことが二度と起きないように、あの体験のことは語り継いでいかなくてはならないと思う。そういった意味でも阿智村に建てられる予定の「満蒙開拓平和記念館」にも大変期待している。

。「水曲柳開拓団」について。

飯田・下伊那からの満州開拓団としては最大規模で吉林省舒蘭県(現舒蘭市)の水曲柳鎮にあった。下伊那郡市田村(現高森町)出身で当時、満州吉林省日本領事館朝鮮課長であった松島親造の呼びかけにより下伊那郡町村会を送出母体として組織、送出された松島自由移民団4団の一つ。昭和12年3月に第一次42名が入植、終戦時には267戸、1,079人が在籍していた。終戦後、生き残った団員のうち一部は新京(現在の長春市)で越冬。また一部は水曲柳の頭道河子などで越冬、共に栄養失調、発疹チフスなどで多くの犠牲者を出した。終戦時の在籍者1,079人のうち286人が死亡、未帰還者24人、不明12人で、祖国の地を踏むことが出来たのは召集復員78人を含め736人であった(長野県開拓自興会編「長野県満州開拓史」より)。

水曲柳開拓団の関係者は、戦後、「水曲柳会」(現・竹内和市長)を組織。水曲柳会では現在も概ね2～4年毎に旧水曲柳開拓地の現地を訪問する訪中団を派遣しており、現地の小学校への寄付等含め、現地との交流活動を重ねている。飯田・下伊那からは旧満州に多くの開拓団が渡り、戦後、これらの生還者による親睦組織も作られたが、それも高齢化等によりほとんどが解散等してしまい、現在も組織立って活動し、現地訪問、交流等を継続しているのは、この水曲柳会と泰阜村の大八浪開拓団くらいになってしまっており、現地の児童支援等までして交流している水曲柳会のようなケースは全国的にも珍しい。

なお、水曲柳会では今年9/22～26の4泊5日で、この水曲柳開拓地を友好交流する訪問団の派遣することになっており、一般市民の方でも参加大歓迎とのことなので、問い合わせ等は同会事務局長の寺沢秀文さん(電話24-6186。信州不動産鑑定)まで。